

香川県三豊市荘内の浦島伝説

— 伝説の生成と展開 —

山田 栄克

— はじめに

浦島伝説は日本各地で伝承されている⁽¹⁾。本稿で取り上げる香川県三豊市もその一つである。長くなるが、どのような話か確認しておこう。

家の浦で生まれた与作は生里へ移り住む。その家は「新屋」と呼ばれた。その後、与作は仁老浜のおしもと結婚し、浦島太郎が生まれる（「生里」の地名由来）。

成長した浦島は、明神の里（箱浦）に移り住み、漁業に従事するようになる。そして鴨の越へ行く途中の弁天の浜で、子供にいじめられている亀を助けて海に放す。その後、箱浦の亀石で、助けた亀に乗せられ、竜宮へ行く。

望郷の念から乙姫に付き添われ帰るが、その帰路、潮流に流されて積浦の金輪の鼻につく。そこで竜宮からの宝物を積むが、乙姫が金の腕輪を落とす（「積」、「金輪のそわい」の地名由来）。

その後、乙姫は粟島の姫路に滞在し、竜宮へ帰った（「姫路」の地名由来）。

あまりの故郷の変貌ぶりに落胆し、年老いることのない浦島は不老浜に住み、再び竜宮へ行きたいと願う（「不老浜」の地名由来）。帰郷から三年後、竜宮へつれて行ってくれた亀の死骸が粟島に流れ着き、浦島が葬る。その祀ったところが「亀戎社」、霊を祭ったのが箱の「大空」である。浦島は、そこで竜宮の話や竜宮踊りを教えた（「竜宮踊り」の由来）。

そして箱の竹生島にある父母の墓の前で玉手箱を開き、老人となる（「箱」の地名由来）。玉手箱から上がった紫煙は紫雲出山にたなびいた（「紫雲出山」の地名由来）。

仁義深い老人となった浦島は仁老浜で数年過ごす（「仁老浜」の地名由来）。その後、父母の墓前で永眠し、その霊は昇天した（「上天」の地名由来）。浦島は竹生島の父母の墓と同所に葬られる。後人がそこに「諸代竜王」の碑を建てた。

このように、三豊市の浦島伝説はかなりの数の事柄、主に地

名、と結びついている。そして父親である与作の出生地「家の浦」以外は、旧荘内村である。⁽²⁾

荘内村は、香川県西部の三豊市にある半島一帯にあった村で、一八九〇年に大浜浦と生里浦、箱浦、積浦が合併し、生まれた。その後、一九五五年には荘内村と粟島村の二村を詫間町が吸収、二〇〇六年に詫間町を含む七町が合併して三豊市となった。

この旧荘内村で調査を行った限りでは、程度の差こそあれだれもが浦島伝説を認識していた。しかし、これだけ多くの事物と結びつき、また認識されている浦島伝説であるにも関わらず、文献ではあまり時代が遡れない。そして確認できた資料を見ていくと、戦後に大きく変化している。

そこで、まずは伝説の変化について文字資料を中心に確認しつつ、その背景について考えていく。

二 浦島伝説に関する記述とその周辺

1、戦前の浦島伝説とその周辺の記述

現在、旧荘内村に関する文献で「浦島」という言葉が確認できる最も古いものは今川貞世『鹿苑院殿巖嶋詣記』（一三八九年）である。

宇治は□りなといふ嶋々有。箱のみさきといふも侍り。

へたて行 八重のしほちの 浦嶋や

箱のみさきの なこそしるけれ
讃岐國にもなりぬ。⁽³⁾

ここでは箱という地名、そして「浦島」という言葉が確認できる。ただし、ここでの浦島は「浦島太郎」という人名の浦島ではなく、地名としての浦島であるようだ。

荘内半島の基部の低地一帯が船越であり、満潮時は海面より低い所で、昔は三崎を廻って東から西へ行くより、舟はここを満潮の海面にのって渡るかまたは地上にコロを敷いて舟を通していたと言われ、ここを「船越」と名づけたという。

そのために荘内半島は三岬でなく島になったわけで紫雲出山をのせたこの半島はすなわち浦島であった。(中略)「浦」というのは、入江や海岸の名称で〇〇浦という七浦をのせた島であり浦島といわれる所以である。⁽⁴⁾

時代は下り、『金毘羅参詣名所図会』（一八四六年序）には次のように記されている。

鶴島（仁保の正向にあり。俗に大づたといふ）

亀島（鶴島の左に見ゆる島なり。鶴島より二丁ばかり隔てり、俗に小づたといふ）

平石（鶴島の傍、海中にあり。石の面あらはるる事およそ長さ八間ばかり、幅五間余あり、もつとも面たひらかにして畳を敷くがごとし。これによつて春秋の長閑なる日は雅俗ともに弁当・竹筒を携へ、ここに渡りて詩作るあり、歌よむあり、諷ふあり、舞ふありて、己がまにまに楽しみ尽くす。実

に國中無双の奇石なり。かるがゆゑに、いにしへより当国の相撲取の名乗に平石と号するあり、これまつたくその力量を称し、無双の大石に比したるなり)

箱ノ岬(仁保の浦より西北の方にあり。本山の荘よりつづきて、その間七里の岬なりと云ふ。海上に突き出づる事抜群にして、左右にくらぶるものなし。箱浦ともいふ。浜の方に御崎明神の社あり、村中の産土神なり)

大浜 積之浦 生利ノ浜 花御前(ともに岬の本に列なる)⁽⁵⁾

ここでは、後に『讃岐名勝栞』で浦島が竜宮へ旅立ったといわれる平石や葛島についての記述が確認できるが、浦島伝説については記されていない。また箱についても同様である。

管見の限り、浦島伝説に関する記述で最も古いものは一九〇七年の矢原理平『讃岐名勝栞』である。

二尾ノ浦、豪家千軒余薨ヲ並フル富地也。昔雄略帝二十二年春浦島太郎□子當浦ノ者ニテ常ニ平石上ニテ佚游快樂ヲ極メ居或日龜ヲ釣得夫ニ駕シ海宮ニ至リ其宮殿樓閣ノ美言ヘカラスサレト故郷愛慕ク思ヒ歸ルニ臨ミ仙女ヨリ玉手筥玉ヒ戒テ日此宮開クナカレト云歸リテ見レハ故郷ノ風俗豹變セシ故問聞ハ昔浦島カ海ニ浮ンテ歸ラヌト云時ニ桓武帝御世三百四十八年歴テ歸ル不審ノ思ヒヲナシ則玉手筥ノ符ヲ切開キ見レハ中ヨリ雲煙ノ皓然空ニ上リ今マテ美男子タル容貌忽チ白髪ノ極老ト貌チヲ變シ程ナク死亡セシトナン浦島カ出生ノ地ナル故積ノ浦香田浦仁尾ノ浦ト云玉手筥開キ見ル所ヲ筥

ノ港ト呼傳ヘシトナン⁽⁶⁾

これを見ると、旧荘内村の事物と多く結びついている現在の伝説とかなり異なっている。

内容はともかく、浦島伝説が確認できるようになったにも関わらず、その後の『讃州府志』(一九一五年)や『西讃府志』(一九二九年)では浦島伝説とは関係のない地名由来を記している。⁽⁷⁾

次に浦島伝説が確認できるのは一九三四年に『旅と伝説』へ寄せられた草薙武吉の『讃岐仁尾浜の浦島傳説』⁽⁸⁾である。ここでは出生地は仁尾町であり、『讃岐名勝栞』と同様、平石で釣りをしていたところを亀に乗せられたとしている。そして行った先は伊吹島であるという。この伊吹島は隣の市である観音寺に属する島である。

さて、先に挙げた浦島に関する文献で竜宮へ旅立ったとしていた平石であるが、名勝として有名だったらしく、多くの文献に記された。しかし、管見の限り、浦島との関係を表したものはこれら以前には遡れない。⁽⁹⁾

ここまで挙げた戦前の文献資料を見ていくと、冒頭に記した旧荘内村を中心とした浦島伝説とはだいぶ違うことが分かる。そのことから戦前の段階では、旧荘内村を中心とした浦島伝説はあまり知られていない、もしくは記されなかった伝説だったということが考えられる。

しかし、戦後になると旧荘内村において浦島伝説が活性化し

ていく。

2、戦後の浦島伝説とその周辺の記述

表紙に一九四八年二月という日付とともに三倉康坤「浦島太郎の研究」⁽¹⁰⁾と題されたノートを見る機会を得た。この三倉康坤とは、庄内の郷土史家でもあった三倉重太郎氏のペンネームである。三倉氏は一九〇〇年生まれで、小学校の教員や教育委員など長年に渡って教育に携わっていた人物である。

このノートには、「丹後国風土記逸文」をはじめ、浦島伝説やそれにまつわることなど様々なことが記されている。その中でも注目したのは、「庄内浦島子の伝説」と記された箇所である。ノートに記された順に、まずは「新田善造氏の説」を見ていく。

生里に生れ／家の浦に棲む／よもぎの浜で亀を救う／
糸之越：浦島太郎の釣糸が越える〓程に狭き所と亀にのせられ瀬戸の島々（海宮）をめぐる〓三百年、姫に送られ玉手箱もらつて沢山の宝「七宝」を積んでかえる〓積の「金輪」へ
〓姫の金輪をおとした所と〓
「七宝山」〓この宝を七浦にわか〓／積浦〓宝を積んで来た為、／「姫路」〓粟島の小さな部落：姫を〓〓めた所と、
「箱浦」〓玉手箱に外箱を造らせ「大工」といふ家あり、
室浜〓不老濱にしてここに居る〓／

仁老浜〓仁老浜で生を終ると仁のある老人いわく／紫雲出山は玉手箱より出でし煙が山にかかるに名づく。

これは戦前の資料に比べれば、現在のものに内容が近い。ただし、説という言葉からこれが伝承されてきたものなのか、新田氏による創作が加えられているのかははっきりしない。ちなみにこの新田善造氏は箱に住み、教員をしていた人物で、後に出てくる彫刻家新田藤太郎氏の兄弟にあたる。

次に大西友吉氏の説を見ていく。この人物は後に自ら浦島太郎と名乗り、浦島伝説を盛り上げていった人物である。説の冒頭には「祖母「亀」の寝物語りに依ると冒頭して説く」と記されているように、祖母から聞いた話として記録されている。そして以下に続いていく。

祖先是積新田の「新田」：興作が生里へ／仁老浜のしも美人と婚して浦島太郎（太兵衛）を生む〓／
十八才迄生里で成長せしも。／箱（明神里）へ移り明神社のふもとにいをりを結ぶ〓釣りを業とする〓
箱浦の鼻で亀に魅せられた様になつて〓何処ともなく消えてゆく〓
帰る〓「五十年」経ていた、：家なし：〓〓〓に仮住す、〓
亀の死をき、霊を求めてみそら（今の大空）にまつる
玉手箱〓玉出箱：〓竹生島のあたりに杲然としている時傍に玉手箱あり〓開けば玉子三つとそてつあり
玉子を抱きて二羽の鳥出る そてつは寺門に植えた、〓之を

二羽鳥とし「鳥居」の意義

之をくぐりて毎日みそらにまゐる、／そこで竜宮城の話や、踊りを娘子供らに語る

おぞらの竜宮踊り／旧六月廿三日に今も新米をもつてこゝに踊りをしてまつる

この大西氏の説は玉手箱の件がかなり変わっているが、その他は現在のものとかかなり似通っている。

そして三倉氏は私案として次のように記している。なお、傍線は執筆者によるもので、く線は新田氏、…線は大西氏、―は両氏と重なることを表している。

浦島太郎

生れ＝生里、…箱浦に住む、家の浦に居り／鴨の越＝亀を助け放つ／箱浦より龍宮へ／三百年／

竜宮より帰る＝積浦上陸／姫路へ姫をおく／箱浦にかへり…玉手箱をあげる／竹生島…老翁となり／

亀の霊を＝粟島に流れつきし亀の…「お空」に祀る＝ここに集る娘子供らに龍宮時代の話や踊を教えた

龍宮踊り／今に旧六月廿三日／死んで／お墓＝お空にまつる＝竹生島？／

仁老浜、老いて居たが／室浜 □□いたか…不老の浜として／

時代＝天長年間破

これを見ると、三倉氏は新田氏・大西氏の説を用いつつ、自

らの私案を考えていたことが分かる。

また、このノートの違う箇所には「亀に関する実話 粟島―亀蛭子神社に因む話」として次のような話が記されている。

亀の死骸を埋めし所□□波に洗はれて現はれしを益田九兵治なるもの（現在の益田房吉の二代前の祖父）埋めしものなるが「当代の房吉」氏の夢に乙姫現はれて自分は亀蛭子神社の神体「亀」である。

何度埋められてもさらされて困るからあそこをきれいに石垣を築いて守つてまつてくれと

この話を疑うな……その□□証拠としてあの石の下を掘れそこに宝あり云々

そこを掘れば□の掟 金のご神体現はる 今に之を益田家に祀る…旧三月十日命日祭あり。其後、亀蛭子神社の周囲を石垣で廻らし時の村長らの同意を得て今の社を建立したものである

ここからも分かる通り、この段階では亀戎社は浦島とは関連付けられていない。また後に浦島の霊が昇天したから「上天」という地名由来も出て来ない。

次に一九四八年四月稿、一九五〇年九月修正と記された謄写版で紐とじの『伝説 さぬき 浦島太郎の研究』を見て行こう。

この資料に記されている話は、「香川県三豊市の浦島伝説記述比較表」を見て分かる通り、その後の資料とかなり似通ったものとなっている。執筆者は先の三倉氏である。骨子は三倉氏の

帰りついたところ	姫路	不老浜	亀のその後	竜宮踊りの由来	玉手箱を開けたところ	仁老浜	玉手箱の煙	死んだところ	浦島の墓	備考
×	×	×	×	×	宮	×	×	×	×	—
艾ヶ浦（大浜か）	×	×	×	×	箱	×	紫雲出山	×	×	平石北側の浦島臺で常に釣りをしていた浦島臺でとれる鯛を浦島鯛と呼んでいた
積（金輪）	×	○	×	×	×	○	紫雲出山	仁老浜	×	七宝山は浦島の宝を分けたことから名づく「大工」という家糸の越
×	×	×	霊を大空に祀る	○	竹生島	×	×	×	×	祖母の寝物語 浦島太郎（太兵衛） 玉手箱の中身は玉子
積浦	×	×	霊を大空に祀る	○	箱浦	○	×	×	竹生島？（箱）	仁老浜…老いていたか 室浜…不老の浜か
積浦金輪の鼻	○	○	亀戎社霊を大空に祀る	○	竹生島	○	紫雲出山	竹生島	竹生島（箱）	浦島太郎（太兵衛）
関の浦→室浜	×	×	×	×	箱	×	紫雲出山	×	×	糸の越で玉手箱の糸のすそがとけた
積浦	○	○	亀戎社 霊を大空に祀る	○	×	×	紫雲出山	竹生島	×	霊は紫雲出山山頂に竜王社としてまつる
積浦 金輪の鼻	○	○	霊を大空に祀る 亀戎社	○	箱	○	紫雲出山	竹生島 上天	竹生島	浦島が釣糸をもって通っていたところだから糸の越。 ここに腰掛石もある
×	×	×	×	×	宮	×	×	×	×	『讃岐名勝菜』の引用
金輪の鼻（積浦）	○	×	霊を大空に祀る 亀戎社	×	箱浦	○	紫雲出山	箱浦	箱浦	浦島太郎（公太郎）
積浦	○	×	亀戎社	×	箱浦	×	紫雲出山	×	箱	浦島太郎（公太郎） 亀に乗せられる件なし
積浦 金輪のそわい	○	×	霊を大空に祀る 亀戎社	○	箱	○	紫雲出山	竹生島 上天	箱	—
金輪の鼻（積浦）	○	○	亀戎社	×	箱浦	○	紫雲出山	×	×	浦島が釣糸をもって通っていたところだから糸の越。
積浦 / （金輪のそわい）	○	×	霊を大空に祀る 亀戎社	○	箱	○	紫雲出山	竹生島 昇天	竹生島（箱）	—
金輪の鼻（積）	×	×	（亀戎社）	×	竹生島（箱浦）	×	紫雲出山	×	×	話者 三倉重太郎
×	×	○	霊を大空に祀る 亀戎社	○	箱浦	×	紫雲出山	竹生島 上天	竹生島（箱）	話者 三倉重太郎
積浦 / 金輪のそわい	○	×	霊を大空に祀る 亀戎社	○	箱	○	紫雲出山	竹生島 昇天	竹生島（箱）	浦島が釣糸をもって通っていたところだから糸の越。 ここに腰掛石もある

香川県三豊市の浦島伝説記述比較表

	資料名	発行年 執筆年	両親の出生地		浦島の出身地 居住地	きっかけ	出発点	行き先
			父	母				
①	『讃岐名勝栞』	1907年	×	×	積ノ浦・香田浦 仁尾ノ浦	平石（仁尾町）で 亀を釣り上げる	平石	海宮
②	『讃岐仁尾浜の浦島傳説』	1909年	×	×	仁尾の古江	×（大亀に乗せられて）	×	伊吹島
③	『浦島太郎の研究』 ノート新田善造氏の 説	1948年～	×	×	生里→ 家の浦	よもぎの浜（大浜か） で亀を救う	糸の越	島々海宮
④	『浦島太郎の研究』 ノート大西友吉氏の 説	1948年～	積新田→生里	仁老浜	生里→箱	亀に魅せられて	箱浦の鼻	×（龍宮）
⑤	『浦島太郎の研究』 ノート三倉氏私案	1948年～	×	×	生里→箱、家の 浦	鴨の越で亀を助け、 放す	箱崎	龍宮
⑥	『伝説 さぬき浦島太郎の研究』	1948年～ 1950年	仁尾の家浦 古家→生里	仁老浜	生里→箱	鴨の越で亀を助け、 放す	箱浦	竜宮（異説も）
⑦	『讃岐の浦島太郎物語 と大観光地』	1950年 6月か	×	×	家浦	生里で亀を助け、 放す	御幸石	龍宮／燧灘／ 伊吹島
⑧	『浦島太郎の生国』	1950年 9月	仁尾の家浦	×	生里	×（蜃気楼に魅せられて）	御幸石	対岸（靉）
⑨	『観光浦島』	1952年	仁尾の家浦 古家→生里	仁老浜	箱浦	鴨越で亀を助け、 放す	箱崎	竜宮 （異説も）
⑩	『仁尾町誌』	1955年	×	×	積ノ浦・香田浦 仁尾ノ浦	平石（仁尾町）で 亀を釣り上げる	平石	海宮
⑪	『週刊香川』	1958年	仁尾の 家浦→生里	仁老浜	生里→箱	鴨の越で亀を助け、 放す	沖（箱とも）	島々（龍宮）
⑫	『さぬきの伝説』	1959年	家の浦	×	×	×（鴨の越で亀を 助け、放す）	×	島々竜宮
⑬	『詫間町誌』	1971年	家の浦→生里	仁老浜	生里→箱浦	鴨の越で亀を助け、 放す	箱浦（亀石）	竜宮
⑭	社会科副読本『わた したちの詫間町』	1975年	家の浦→生里	×	生里	鴨の越で亀を助け、 放す	箱浦（亀岩）	竜宮
⑮	『詫間の文化財』第6 集	1977年	家の浦→生里	仁老浜	生里→箱浦	鴨の越で亀を助け、 放す	箱浦（亀石）	竜宮
⑯	『香川のむかし話』	1977年	×	×	三崎	父の生地で亀を助 け、放す	どんがめ石	竜宮
⑰	『さぬき詫間の民話』	1993年	家の浦→生里	仁老浜	（生里）	島々の美しさに憧 れて	×	島々
⑱	『浦島太郎のふるさと』	1995年か	家の浦→生里	仁老浜	生里→箱浦	鴨の越で亀を助け、 放す	箱浦（亀石）	竜宮

私案と重なっているが、ところどころで新田氏と大西氏の説が入っている。その上、研究ノートの私案では、浦島と結びついていなかった「亀戎社」の話が浦島の話となり、また浦島の霊が昇天したという「上天」も付け加えられている。この「上天」について次のような話が確認できた。

浦四国っていう、八十八カ所の札所が一か所あった、十何番かなあ。荘内ぐるぐるーつと八十八カ所あるわけや。上天さんの中にもあるんや。んだけど本尊さんは上天大師っていう仏像もあるし。水も出おつたな。休憩所にしてな。そんで、こらで、わしらの子ども時分に雨乞いって。高いとこ火焚いてな、行ったことある。なんとかかんとか念仏唱えて、ボンボンボン火を焚いて雨乞いするわけや。上天の前に広場があつて、そこで焚くような状態にしとつたわけや。

上天さんとか、紫雲出の中間にそこだけ水湧き出たことか、新田城とかいう城があつたとかは聞いたけどな。浦島の伝説は親から聞いてないなあ。(積 男性 一九三三年生) 調査を進めていくと、この話者のように「上天」は浦島伝説との関連ではなく、浦四国の一つとして認識されている場所であることが分かった。⁽¹²⁾ こうしたことから「上天」と「亀戎社」は浦島伝説への読み替えが行われたと考えられる。

また、墓についてもノートでは「竹生島？」としていたものを、「？」を取り除いて「竹生島」としている。⁽¹³⁾ このようにノートに記された「浦島太郎の研究」から謄写版

『浦島太郎の研究』への過程を見ていくと、現在の浦島伝説は様々な説や伝承を机上で取捨選択して、整理されたもの、作られたものであることが分かる。

そしてこの作られた浦島の話は、浦島伝説として発表されていくこととなる。これらの伝説を作り上げていく過程で中心のな役割を果たした三倉氏も積極的に発信していった。⁽¹⁴⁾

では、なぜこのような浦島伝説を作り上げる必要があつたのか。そして、それを発信していったのはなぜだろうか。

三 浦島伝説を取り巻く環境

詫間町の歴史民俗博物館の館長をしていた真鍋道弘氏は「詫間の浦島伝説について」の中で

当時郷里の積浦に帰省されていた日本彫刻界の権威者・新田藤太郎氏が、「半島に散在する集落の地名こそ、浦島物語から命名されたにちがいない。その地名の研究こそ先決である。」と提案し、それを受けて郷土史家・三倉重太郎氏によってまとめられていったといえます。⁽¹⁵⁾

と述べている。つまり浦島伝説が観光の為に整理されていったということだ。ここからは、その過程を見ていこう。

荘内の一集落である箱で「香川県三豊郡庄内村箱浦観光促進会」という会が一九四八年二月に発足している。この会の発足の時期と浦島伝説について三倉氏がまとめた時期が一致す

ることから、この観光促進会が浦島伝説をまとめていくきつかけになったと思われる。

謄写版『傳説 さぬき 浦島太郎の研究』には次のように記してある。

本村に此の伝説（浦島伝説―筆者注）が流布されていたのは古い歴史をもつている。編者が初めて之を村誌に「本村に浦島太郎の伝説あり」として採録したのは二十年の昔であった。村の何某が伝え何家に残り誰が喧伝したというものでもなく又村民の多くは之を知らず関心も有[□]ず村誌に発表（謄写版の小刷子……どこかの有志の宅に残されている筈）した当時も何の驚きも反響もなかつたもので正直の所編者も誰から聞いたと云うのでもなく私一人で偶然に考え出し創作したものでもない。今でも時々人々から「あの伝説の最初はどこから出たのか」と質問されるが私はそれに対して適確な返答は出来ずにいるので私自身もどうも不思議だとさえ思っている次第である。

こんな有様でこの伝説が本村に生れたまゝ、温存（でなくて冷存か隠存）され少しも發展しない間に或は観音寺町に琴弾公園に因んで浦島伝説が作られ（たしか松尾明德氏？）仁尾町が薦島公園宣伝にこの伝説を取入れられたが、何れも浦島発祥地として結びつき観光地としてそのおかげを蒙むつたというまでには立ち至らなかつたように思う。¹⁶⁾

ここには十数年前に浦島伝説を発表したが、そのまま何の影

響もなく止したとある。このことは研究ノートでも確認できる。こうしたことから今のように荘内の人々ならだれしもが浦島伝説を知っているという状況ではなかつたこと、そしてそれを知ってからも特に熱心に取り組むということもなかつたことが分かる。それにも関わらず、なぜ浦島伝説を観光に活かそうとしたのか。

さぬきは東に鬼ヶ島の桃太郎の伝説があり、これに呼応して西に浦島の伝説を有し全くお伽の国として平和文化建設にふさわしいことを郷土人としてよろこびとし且つ将来さぬきが平和日本の代表となるべき^{□□}祈つてやまない。¹⁷⁾

つまり、高松の桃太郎伝説と呼応するような形で浦島伝説に注目したというのである。また、

伝説は人に依り種々異なり伝えられているが私は一応それらを調査比較し所謂浦島伝説の先入的主観性や情緒をこわさないように注意すると共に浦島全村域に亘つて関係のある地名・行事・習慣等地域性を生かす様努力してま¹⁸⁾とめてみた。

という記述から、先程の読み替えの理由の一端と荘内村に伝承が固まつている理由とがうかがえる。

そして同書の「浦島観光計画案」には、かなり壮大な計画が記されている。その中でも注目したのは「施設要領」内の「名所・史蹟・勝景・施設」十項目の中の二つである。

8、鴨越…丸山

浦島明神社の創建（昭和二十四年にできる）（中略）

10、生里、仁老浜

伝説に因む「家」の設定

8の鴨の越の浦島神社と言われている社は、実際には童王社と掲げてある。このように「観光」のために新しく神社を建立するというのはかなり稀有な事例ではないだろうか。

また、10の伝説に因む「家」の設定に応じたのかははっきりしないが、ノートにも登場した荘内箱の大西友吉氏は自ら浦島太郎と名乗り、精力的に活動していく。¹⁹⁾

こうして作り上げられていった浦島伝説だが、それと前後して香川県の郷土史家である福家惣衛氏や宮尾しげを氏が荘内の浦島伝説を取りあげている。そしてこの両氏に取り上げられたことについて「誠に心強い次第である」と記している。つまり、それまで反響がなく価値があまりなかった浦島伝説が、高松の桃太郎伝説や研究者によって文化的に価値あるものとして見出されたと読み取れる。

もちろん伝説は、伝承者がいて成り立つものである。先に述べた通り、この旧荘内村では程度の差こそあれほとんどの方が浦島伝説を認識している。その理由の一つとして教育があるように思われる。実際に教育の現場で浦島伝説は活用されている。例えば、詫間町社会科副読本には「伝説 浦島太郎」として、どこにどのような伝説があるのが地図に説明を書き入れる形で掲載されており、また「第三十七回全国へき地教育研究大会（一九八八年）」が箱浦小学校で行われた際には児童発表と題し

て、箱浦小学校の児童たちが荘内の浦島伝説を題材にした演劇をしたことが分かっている。²²⁾

また三倉氏の作った「さぬき浦島音頭」²³⁾は盆踊りの際に口説の代わりにも歌われたものらしく、今でも覚えている方が歌ってくれた。そして浦島伝説は荘内村から詫間町になってもシンボルのように扱われていく。その一例として「ふるさと創生基金」が挙げられる。²⁴⁾

このように浦島伝説を観光資源として活用するために机上で整理されていった伝説は、教育や行政の精力的な活動によって、そこに住む人々や地域に根付いていっていると見えよう。²⁵⁾

四 おわりに

今回、取り上げた旧荘内村の浦島伝説は、戦前はそれほど活性化していなかったが、戦後、観光促進のために様々な伝承が机上で浦島伝説に読み替えられ、また整理されていったものがあることが明らかになった。そうして出来た話は、積極的に発信していったことで、現在では浦島伝説は荘内の伝説として広く認識されるに至った。

本稿では旧荘内村の浦島伝説に絞ったが、仁尾町で次のような話を聞くことができた。

（鳶島に―筆者注）亀磯いうのあるやろ。こっちにちっこいのが出るんや。そこから亀さんに乗ったとか。ここに亀が

出てきて、ここに亀に似た石があるんや。鴨の越で砂浜で亀を助けたとかあるんやけどな。

浦島太郎いうんは、子ども時分から童話で、そういうんで学校で、この地区はこういうんやいうて、遠足でいうたらそういう地区いつて。子ども時分からな。浦島さんのことに關しては仁尾町よりは詫間のほうが主体やけどな。(仁尾町男性 一九四二年生)

ここから仁尾町でも浦島伝説が学校教育という場で活用されていたことが分かる。²⁶⁾この話者の小学校時代となると、旧荘内村で伝説が整理され、発表されて始めた時期である。その後浦島伝説は荘内の伝説として広く認識され、仁尾町の浦島伝説は、ほとんど知られなくなった。

しかし、戦前の文献では仁尾町も浦島伝説の舞台であった。また、鳶島の近くには蓬萊橋という橋がある。土地の持つイメージや地名は伝説を考える際に欠かせない要素である。

今後は、仁尾町における伝説の発生と衰退も含めて考える必要があろう。

注

- (1) 「うらしま伝説交流サミット」の二〇〇四年の資料によれば、浦島伝説の伝承地として二十四か所挙げられている。
(うらしま伝説交流サミット『第四回うらしま伝説交流サミット記録集』二〇〇四 うらしま伝説交流サミット)

(2) 家の浦では、浦島の話は旧荘内村の話として認識している。その一例を示しておく。

浦島太郎はこっから出たとかいう。むこうの荘内村の人々はそういうですけど。われわれは分からない。じいさんばあさんではわかりませんわな。お祭りなんかいつてな、八幡さん(荘内に鎮座―筆者注)の拝殿の中で、いろいろ話したら、家の浦が本家だからなって。(仁尾町家の浦 一九二一年生 男性)

(3) 塙保己一編『群書類従』第十八輯 一九二八 續群書類従完成會

(4) 三倉重太郎「荘内の地名」『詫間町の文化財』第八集 一九七九 詫間町教育委員会

(5) 松原秀明編『日本名所風俗図会』十四 一九八一 角川書店

(6) 矢原理平『讃岐名勝菜』一九〇七 日柳活版所

(7) 『讃州府志』には「箱浦 浦ノ名箱崎八幡宮鎮リ玉フヨリ得タリ此浦明治廿三年二月荘内村ノ大字トナレリ」(増田休意『讃州府志』一九一五 香川新報社)とあり、『西讃府志』には

積浦

此地、西ノ方山ヲ負、東海ヲ受テ、船積ノヨロシキ浦故名クトモ、又稲荷神マセシヨリ、年能ク實テ、田頭ノ稻積ガ如シ、因テ名ヲ得タリトモ云、(後略)

箱浦

浦ノ名、箱浦八幡宮、鎮リ玉フヨリ得タリ、(後略)

(8) (舊丸亀藩京極家編『西讃府志』一九二九 藤田書店)とあるように、「箱」という地名は箱崎八幡宮によるものであるという。この箱崎八幡宮について『全讃史』(一八二八年自序)には「恐らく上古筑前箱崎から来た者があってこれを迎えたのであり、それでこの名を得たのであろう。村社である。」(中山城山著、桑田明訳『口訳全讃史付三教一掃論訓釈』一九九一 城山会)と記されている。

また、「箱」「積」という地名については、同じ瀬戸内海の直島にも「箱島 家島の東の島で、上皇が京都へお帰りの事を神に祈られた箱をここに埋めたという。」「大積の浦と積浦 保元元年八月十日上皇の船が初めて着いた浦である。その続きの浦が積浦である。」(直島町史編纂委員会編『直島町史続編』一九九〇 直島町役場)と同様の地名があることから、必ずしも浦島でなくてはならない地名ではないことが分かる。

(9) 草薙武吉「讃岐仁尾浜の浦島傳説」『旅と伝説』第七年十一号 一九三四 三元社

(10) 「この周辺の生駒藩の丸亀の御殿さんがな、生駒藩の殿様を接待したときに、あそこの岩にあげて舞をあげたりな。」(仁尾町 男性 一九四二年生)といった伝承が文献資料でも多く確認できる。

(11) 個人蔵。B5のキャンパスノートに記されている。判別できない字は□、改行は/で示した。

(12) さぬき三豊郡庄内村観光委員会編『傳説 さぬき 浦島太郎の研究』一九四八年四月稿、一九五〇年九月修正 さぬき三豊郡庄内村観光委員会

(13) 浦四国というのは庄内半島内に設けられた四国八十八カ所の写し霊場のことである。

(14) この浦島の墓によく似た、石を重ねた事物が庄内半島や隣の町であった仁尾町に多く存在しており、次のような話を聞くことができた。

ゴリンサンいうの、そういう名称で呼んでるの。長宗我部にやられた人。戦ったのかどうかは知らんけど。そういうことはおじいさんおばさんから聞いた。

そのほか、平家の落人の墓としている話者もいる。(積新田 男性 一九三四年生)

(15) 「香川県三豊市の浦島伝説記述比較表」⑯⑰では三倉氏は話者を務めている。

(16) 真鍋道弘『ふるさとの歴史をたずねて』その三 二〇〇二 自刊

(17) 11と同書。

(18) 11と同書。

(19) 二代目からは行政に関わる人物が襲名することとなる。

(20) 11と同書。

(21) 詫間町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの詫間町』一九七五 詫間町教育委員会

(22) 香川県三豊郡詫間町立箱浦小学校『ふるさと学習 浦

島太郎さんとともに—ふるさとにひびき合う心の学習』

一九八九 高橋時春

(23) 詫間町誌編集委員会編『詫間町誌』一九七一 詫間町

(24) 「ふるさと創生の基本構想として、目的を荘内浦島太郎の
伝承とし、目的を実現させる基本戦略として、浦島太郎
の小宇宙創造と交流する。」(『ふるさとの歴史をたずねて』
その六 二〇〇三 自刊)として様々な事業を浦島と関
連付けて行う計画を立てている。

(25) 浦島をあしらった欄干や街灯、マンホールや公衆トイレ
など町のいたるところで浦島を見つけることができる。

(26) ただし、この話者以外は、浦島伝説は荘内の伝説という
認識であり、仁尾町の浦島伝説や『旅と伝説』に記され
た「浦島鯛」などは確認できなかった。

【「香川県三豊市の浦島伝説記述比較表」出典】

①矢原理平『讃岐名勝栞』一九〇七 日柳活版所

②『旅と伝説』第七年十一号 一九三四 三三社

③個人蔵

④個人蔵

⑤個人蔵

⑥荘内村観光委員会編『伝説さぬき浦島太郎の研究』一九四八
稿、一九五〇修正 荘内村観光委員会

⑦福家惣衛『讃岐の浦島太郎物語と大観光地』『郷土研究』讃岐

公論社(『讃岐公論』の抜粋)

⑧宮尾しげを「浦島太郎の生国」『旅』九月号 一九五〇 日本
交通公社

⑨森克己編 三倉重太郎著『さぬき荘内観光浦島』一九五二 浦
島観光協会

⑩仁尾町誌編集委員会編『仁尾町誌』一九五五 仁尾町

⑪『週刊香川』(毎日新聞)一九五八年十月二十五日)

⑫香川県農業改良普及会『農業香川』三十四年九月号

一九五八 香川県農業改良普及会

⑬詫間町誌編集委員会編『詫間町誌』一九七一 詫間町

⑭詫間町社会科副読本編集委員会編『わたしたちの詫間町』

一九七五 詫間町教育委員会

⑮『詫間町の文化財』第六集 一九七八 詫間町教育委員会

⑯香川県小学校教育研究会国語部会ほか編『香川の昔話』

一九七七 日本標準

⑰武田明ほか『さぬき詫間の民話』一九九三 詫間町教育委員会

⑱三倉重太郎編『さぬき詫間町 浦島太郎のふるさと』

一九九五か 詫間町

(やまだ・ひでかつ／國學院大學大学院)

〈付記〉本研究にあたって、三宅重太郎氏のご遺族や三豊市詫
間町図書館をはじめ、多くの方が調査に協力してくださいま
した。感謝申し上げます。